

# ライフストーリー・インタビューの可能性

塚 田 守\*

Possibilities of Life Story Interviews

Mamoru TSUKADA

## はじめに

本稿は、ライフストーリー・インタビューの方法とはどのようなものかを紹介し、その方法の意義について、筆者が関わったインタビュー調査の実践に言及しながら、論じるものである。近年、ライフストーリー・インタビューの方法論、あるいはその方法論を実践している研究に関する文献が多く出版されている（ベルドー 2003年；ホルスタイン 2004年；桜井 2001；桜井編 2006年；桜井・小林編 2005年；山田編 2005年）。本稿は、まず、これらの文献で議論されているライフストーリー・インタビューの方法についてまとめ、なぜライフストーリー・インタビューが可能で、なぜライフストーリー・インタビューという方法に惹かれるのかについて概観する。次に、その理論的前提である「口述性」の特徴をまとめ、ライフストーリー・インタビューという方法論について論じる。さらに、筆者がいままで行ったライフストーリー・インタビュー研究の経験に言及し具体的な事例を挙げ、ライフストーリー・インタビューという方法の意義について議論するつもりである。

## 1. なぜ、ライフストーリー・インタビューか

### なぜ、ライフストーリー・インタビューが可能なのか

教師のライフヒストリー研究に長い間携わったグッドソン（2005年：175頁）は、「人間とは物語る動物なのである。いつも私たちは自分自身の物語を学び直しており、他者や自分自身に対して語ろうと試みている」と述べ、人は自らのストーリーを語りたいという欲求をもっているので、インタビューが可能なのでと指摘している。筆者も日本の高校教師のライフヒストリーやアメリカ人教師のライフヒストリーをこの10年間以上、聞き取り調査をしているが、その調査の経験から、本質的に人は自分のストーリーを語りたいと思っており、自分のストーリーを聞いてもらえることが悦びになることが多いのだと

---

\* 国際コミュニケーション学部 国際言語コミュニケーション学科

いうことを実感している。

ただ、人間は自己の物語を語りたいという欲求があるにしても、なぜインタビューを受け、本来なら他人に話さないことをインタビュアーに語るのであろうか。豊富なインタビュー調査の経験に基づき、小林（2005年：112-116頁）は研究対象者がなぜインタビューを受け入れたかについて考察している。まず第1に、インタビュー調査で自己について語るということは、自己肯定をもたらすからである。個人的経験を語るという表出行為によってカタルシスを導くこと。語ることは、自分の経験してきたばらばらになったものを結びつけて一貫性をもたらし、混沌としたものを整理したり、道筋をつけたり、経験の秩序づけをはかることであり、ストーリーとして外在化することである。また、共同制作の場としてのインタビューの場は、自己を語るストーリーが聞き手に理解され共有される場であり、聞かれたことによってストーリーが承認され、批准されたと認識できる場である。第2として、インタビューの場がエンパワーメントの場になることがあるからである。語り手には、自分自身の声で自分自身のストーリーをもつ機会を得ることを意味する。第3として、インタビューそのものがカタルシスになることがある。インタビューの場で語り手は聞き手としての調査者による共感をともなったうえで「節度ある感情中立性」と「回顧による自己イメージの統一性」、人生の再吟味によって「整理できた」「すっきりした」感覚をもち、経験に意味を与えるという自己肯定を経験することができる。

他人に対してきわめて私的な経験を語るというインタビュー調査が可能なのは、人が自己のストーリーを語りたいという欲求があり、他人に理解され、共感されたいという欲求があるからであろう。

### なぜ、ライフストーリー・インタビューか

では、次に、インタビュアーである研究者は、なぜ、ライフストーリー・インタビューにひきつけられるのであろうか。ここで長い間インタビュー調査を行ってきた2人の研究者の言葉を引用し、ライフストーリー・インタビューをする動機について紹介する。イギリスの教師のライフヒストリー研究者グッドソンは次のように言う。

なぜこんなにもライフヒストリー研究にひきつけられるのかについて、私たちは何度となく話し合ってきた。この研究方法を学問的に正当とする根拠を十分に構築できるとはいえ、根っからの飽くことをしらない他者の人生についての好奇心が重要な動機づけの力になっていたことはよくわかっている（グッドソン：2005年：iii頁）。

他人の人生に対する好奇心、知りたいという欲求があるからこそライフストーリー・インタビューにひかれるのである。

同和地区をフィールドとして20年間以上もインタビュー調査を行っている桜井も次のように言う。

もっとも重要なことは、人間存在そのものや生活経験全体へのつきることのない興味や関心というべきものだろう。他者のライフストーリーを聞くこと自体が悦びになることがありうるのだ。語り手と出会い、インタビューの会話が「対話」へと昇華していく

過程は、語り手にとってはカタルシスを、聞き手にとっては人生経験の深奥にふれた一種のエクスタシーをもたらしうる瞬間でもある。……インタビューを積み重ねるなかで、発見があり、漠然とした研究テーマが練り直され、明確な輪郭をもったテーマが現れてくる。緊張のなかにも対話がはずみ、思わず聞き手自身が自らの生活史経験を振り返って語り手と二重写しの人生を経験する過程こそが、ライフストーリー・インタビュー実践の真骨頂でもある（2005年：17-18頁）。

桜井もまた、他人の人生に対する好奇心、興味、関心をもっていることがライフストーリー・インタビューにひきつけられる動機であると言い、そのインタビューの語り手との相互作用の過程のなかで、語り手が生きた経験を「語られた生」として語り、聞き手は共感し聞くことで、自己の人生について振り返り考える機会になり、ライフストーリー・インタビューをすることに感動と喜びを感じている。

次の節では、ライフストーリー・インタビューの特徴について考えみたい。

## 2. ライフストーリー・インタビューの方法論

### フィールドとしての個人と口述性の方法

1995年に『ライフヒストリーの社会学』というライフヒストリー研究の在り方を明確に定義づけた本が若手研究者が中心になり書かれ、出版された。その本の第一章「ライフヒストリー研究の位相」の中で、佐藤（1995年）は、ライフヒストリー研究を「フィールドとしての個人」と「口述の方法性」という考え方で特徴づけた。

まず、「フィールドとしての個人」という考えを提示し、佐藤は、その時までの社会学がアンケート調査を中心とした数量分析が中心になり、「個人が探求の正統なる対象」にならなくなっているという現状を批判している。人間が関係的な存在であることは否定しないが、その関係を「社会」などという抽象的なことばに回収してしまう社会学的認識が問題であると指摘する。そして、社会を重層する関係性の総体であると見なす必要性を述べ、個人もまた複雑で重層的な存在であると見なし、個人というフィールドに焦点を向けるべきであるとしている。

個人というフィールドに焦点を当てる、ライフヒストリー研究では、「生活」という概念も重要であると強調される。ここで言う「生活」とは、「個人の身の回りの具体的な関係＝構造こそが対象であるとしめすために、もちだされた」概念である。すなわち、「それぞれの顔をもち役割をもつ人々が日常的な生活の舞台に登場し、さまざまな経緯や必然に彩られて、個人をとりまく関係性を構成している」のである。次に、その「生活」はその根本において私的な領域である。制度性の強い公的生活ではなく、これまでの政治史や事件史が長いあいだあつかつてこなかった私生活こそが、「フィールドとしての個人」の探求の中心にすえられるべきものである。そして、その私生活にも歴史的、社会的な規定力が刻み込まれているということを前提としている。その「生活」の実態は、とりわけ中心にいる個人自らのことばによって意識的にまとめられるとき、それはライフストーリーと呼ぶことができる。そのライフストーリーは、見通しにくい「私」＝個人の内面に入り込み、追体験的に検討しようとするとき手がかりとなるテキストと見なされる。

このように、佐藤によれば、ライフヒストリー研究は、主体たる個人の意味づけを重視しつつ「生活」を対象化するという研究である。

ライフヒストリー研究のもう1つの重要な考えは、「口述の方法性」であると佐藤は言う。「口述の方法性」は、1.「口述の現在性」、2.「口述の主体性」3.「口述の現場性」という3つの要素をもつ。

まず、「口述の現在性」という考え。対象者の語りは、現在というコンテキストにおいてまとめられた生活の物語である。それは現在によって組織された過去であり、過ぎ去ったままの時間において表象されたものとは異なる。

次に、「口述の主体性」という考え。表象とそのコンテキストの構造化とが、語る身体としての個人の間から主体的に行われているということに、ライフストーリー資料の戦略性がある。

第3に、「口述の現場性」というべきものを考える必要がある。「現場性」の意味することは、調査という実践のプロセスそのものが遂行される場を意味し、ライフストーリーが強調しているのは、そこにおける相互作用の存在である。話すことを聞いている相手がいればこそ、そこで話される。語り手の表現能力ばかりではなく、聞く調査者の存在形態も、相互作用の実質を規定し、現場のありようを形付ける。

以上、佐藤はライフヒストリー研究における「口述の方法性」の要素こそが、調査者一被調査者関係に問題を深く、そして鋭く踏み込んでいくものであると、社会調査論の上でも問題提起をしているのであると。口述は文字データとは異なり、インタビューという場の相互作用として、語り手が聞き手に感情レベルでインパクトを与える可能性がある。だから、ストーリーとして語られるインタビューでの「語り」は人に直接的に影響するパワーをもつのである（アトキンソン 2006年）。

### インタビューにおける相互作用

桜井はインタビュー調査における語りの特徴について論じ、インタビューの口述の「現在性」、「現場性」、「主体性」という考えを展開させ、インタビューにおける相互作用の重要性を強調する。インタビューの語りは主に2つの位相から成り立っており、語り手が語る「物語世界」＝出来事が筋によって構成されている語りと、メタ・コミュニケーションの次元で語り手と聞き手の社会関係を表現している「ストーリー領域」がある。これまでのインタビュー調査では語り手の情報内容、すなわち、「物語世界」にだけ注意がはらわれ、調査者一被調査者の社会関係はまったく異なる次元の問題としてインタビュー行為とは区別されてきた。語られたことである「物語世界」と語り方としての「ストーリー領域」の相互関係については、まったく無頓着だったとその問題性を指摘している。

そして、桜井（2005年：37頁）は、「いかに語ったか」という語りの形式にも注意をほらう必要があると言う。ライフストーリーは必ずしも語り手があらかじめ保持していたものとしてインタビューの場にもち出されたものではなく、語り手とインタビュアーとの相互作用をとおして構築されるものであると考えられるからである。生活史の作品が語り手とインタビュアーの「共同作品」であるとか、「二重の伝記」と呼んでインタビュアーの立場を「影の伝記」に位置づけることがあるのは、そうした見方にもとづいている。

また、調査者がもつ特徴についても言及し、インタビュー調査において調査者が自らを

反省的にとらえる必要性を強調する。インタビューを行う調査者の側にも、研究者のコミュニティで語られている語りの様式が存在する。フィールドへ出かけるとき、あらかじめ対象者について書かれたさまざまな文献や資料を参照する。フィールドへ入ってインタビューをしようとするとき、なんの思いこみや考えもなくインタビューに及ぶことはまず考えられない。むしろ、フィールドでの初期のインタビューを構造化しているのは、インタビューの場以上に、調査者が属している研究コミュニティの語りの様式である。研究テーマも、こうした枠組みに支配されたモデル・ストーリーとして機能していくことには十分自覚的でなければならない、と桜井は、調査者自身が自らをつねに反省的にとらえるべきだと言う。

さらに、桜井（2005年：180-183頁）は、インタビューにおける権力性の問題についても注意を促す。調査における聞き手と語り手の権力関係は非対称であることがふつうである。往々にして聞き手は専門家であったり、社会的地位が高い場合が多い。その聞き手の権力が強い場合、語り手は聞き手が聞きたがっているストーリーを語る傾向があると言われている。そこには、「わざわざ東京からきた大学の先生にみやげでももたさないと」といったような、語り手の心遣いもありうる。人びとは、調査者がなにものであるかを敏感に察知して、聞き手が期待しているモデル・ストーリーをあえて語ることもあるかもしれない。語りは、共同行為であるから、調査者があらかじめもっているモデル・ストーリーが、語りをとおして追認されていくことが起こりうる。語りモデル・ストーリーに回収されれば、調査者は「1つの現実」が確認されたことに安堵感を覚えかねない。だから、マスター・ナラティブやモデル・ストーリーの存在によって、沈黙を余儀なくされ無視された語りの断片があることに、私たちは敏感でなければならないと桜井は言う。

### アクティヴ・インタビューという方法

桜井と同じように、調査者自身の反省性の重要性を認識した上で、山田（2005年）は調査が行われている社会的、政治的文脈の重要性を指摘し、「アクティヴ・インタビュー」という考え方を紹介している。語り手は単なる「回答の容器」ではなく、アクティヴなエージェントであることを認識することの重要性を強調する。アクティヴな回答者は、調査者のインタビュアーとの協同で、調査のトピックスを手がかりとしながら、インタビューのなされる状況や自分の経験をリソースとして、物語を語っていくのである。だから調査者である聞き手が自己の調査過程についてリフレクシヴな自己言及的点検を行い、調査者としての自己の立場と、調査がおかれている社会的・政治的文脈を明らかにすることも重要であると言う。

小林（2005年）は、『アクティヴ・インタビュー』（ホルスタイン 2004年）に言及しそのアクティヴ・インタビューの戦略の特徴をまとめ、インタビュー調査をよりうまく実践する方法として、つぎのような点に注意すべきであると言う。まず、インタビュアー/聞き手のアイデンティティが語り手にとって語る物語を方向付けることになるという認識が重要である。自己紹介して何者であるかを示し、聞き手がどのような人であるかを伝えることは、語り手がどのように話すかを導くことになる。第2として、インタビュアーは背景知を使うことで語りを生産的なものにすることができる。背景知にはインタビュアー自身の経験もふくまれ、インタビューそのものが背景知となる。インタビューで得られた

背景知があらたな質問や語りの促進に結びついていくことになる。背景知を得て、その背景知を使う戦略は状況に即した豊かな記述や解釈や説明を促進するので、成果が多い。第3として、インタビュアーが自分自身をインタビューに投入させる必要がある。これは積極的に語り手を刺激し促すことを指しており、語り手が物語を語る活動をはぐくみ、豊かに発展させることをインタビュアー自身が能動的に図ることをめざしている。具体的にはたがいによく知っている出来事や経験、たがいに関心のある話題を出すことで、語りを促進する環境となるラポールの確保につながるだけでなく、特定の意味の地平や物語の結びつきに会話を引き止めて、さらに語り手が詳しく語ることを促す戦略となる。

ここでいうアクティヴ・インタビューという方法は、調査者があらかじめ何らかの理論的仮説をもって、その仮説を検証するために、アクティヴに、あるいは積極的にインタビューすべきということではなく、語り手がアクティヴなエージェントであるがゆえに、聞き手もそのことを考慮し、さまざまな利用できる情報、知識を使い、語り手の語りを促そうとする方法である。

以上、ライフストーリー・インタビューの方法論についての最近の議論をまとめてきたが、そのような議論の視点から、筆者が行ってきたインタビュー調査を反省的にとらえ、ライフストーリー・インタビューの具体的なプロセスについて論じてみたい。すなわち、インタビュー調査の実践の中で調査対象者と調査者である筆者の相互作用から生まれた研究テーマの展開、研究テーマ自体の変化、さらに、語り手による解釈の変化を経験したというインタビュー調査の体験について描写する。そして、なぜそのようなことが起こったかについて論じ、インタビューのもつ方法としての特徴について述べる。

### 3. インタビュー調査の実践から学んで

#### 研究テーマの展開：受験体制の中の教師の分析

筆者は受験体制の中の個人という枠組みで浪人生についての調査研究を行った（1999年）。その後、受験体制が個人に与える影響というテーマを考えていく過程で、受験体制の「重要な参加者」である高校教師を研究対象とすれば、受験体制の理解につながるのではないかと考えた。受験体制を理解するという枠で考えると、浪人生は受験体制の「産物」であるが、高校教師は受験体制の「産物」であり、同時に受験体制を維持する「生産者」であるとみなせるのではないかと考えた。そのような研究関心をもち、高校の教師から受験体制についての「生の声」を聞き取ることによって、愛知県における受験体制の理解を深めることを目的として、この研究を始めた（塚田 1998年）。

以前の予備校調査に基づき、受験体制についての仮説をもち、そのテーマについて聞き取りをしようとしたが、教師たちが筆者に熱く語ってくれた物語は、「受験体制」のことだけでなく、主に、「組合時代」、教職における「昇進と出世」についての自分自身の「人生の物語」であった。この調査は、19人の男性高校教師に対して行われたインタビュー調査であったが、その中でも、特に50歳代の教師たちは「組合の時代」の経験について熱く語ってくれた。それは、彼らが新任教員として高校に勤め始めた頃の「青春時代の物語」でもあった。

インタビューした教師たちの「組合の時代」についての語りとその人生に対する影響

は、それぞれの教師たちの中にある「いま・ここ」で意味ある事件として、インタビューという場で立ち上がってきた「語り」であったといえる。それは、受験体制についての意見だけをデータとして収集しようとした筆者の当初の目的とは異なった調査の展開であった。では、そのような展開は、なぜ起こったのだろうか。

まず第1に、インタビューは相手の話をそのまま聞くという調査者による「無知の姿勢」(アンダーソン 2001年:174-232頁)によって進められたので、教師たちの自由な語りが生まれてきたのではないか。インタビューは、「これまでの先生の高校教師としての体験を教えてください」と「高校教育についての意見を教えてください」という2つのお願いで始められた。調査者である筆者は具体的に受験体制についての質問をしていくという形式ではなく、調査対象者に彼ら自身の物語を語ってくれるようお願いし、その語られた意味についての説明をしてくれるような立場をとったことが、そのような語りを生み出す結果になったのではないか。

「無知の姿勢」はセラピストの取る1つの心構えであり、態度であり、信念に通ずるものである。セラピストは特権的に知識を必ずしも享受できないし、また他人を完全に理解することはできないという前提で、「教えてもらう態度」をとり、セラピストがクライアントの世界を理解できたように、筆者もまた、教師たちにとっての意味ある生活経験を聞くことになったのではないだろうか。

クライアント自身が語る物語を聞く重要性を強調するセラピストと同じように、チェイス(Chase 1995年)は、自ら受けたインタビュー調査のエピソードに言及し、社会学的仮説を当てはめて行うインタビューの問題性について論じている。チェイスはある社会科学を専門とする大学院生に、女性として研究職に就く動機付けになった要因についてのインタビュー調査を受けた。チェイスは動機付けになった要因については話さず、大学院が自分にとってどのようなものだろうかと考え大学院に行き、大学院に行ったら結局研究職に就いたという自らのストーリーを話した。最初から研究職を志向していなかったのに、実際には動機付けの要因など何もなかったという語りになってしまった。インタビューである大学院生は、社会学的テーマとして、女性研究者の動機付けの要因についての仮説をもって質問したが、チェイスが自らの動機付けの要因を語らなかったため、社会学的な問題について質問した。それはチェイスの社会学的問題について意見を求めるものに過ぎなかった。結局、その大学院生は女性一般の傾向についてインタビューしただけで、チェイスが具体的にしたことについて語るような質問をすることはなかった。この大学院生は、女性研究者になるには何かの動機付けがあるものだという仮説に基づいてインタビューをしたので、チェイスが具体的にどのように研究者になったかという語りに注目し聞くことができなかった。

チェイスはまた、自ら行った特異な背景をもち教育長になった女性に対してのインタビュー調査でも社会学的用語を用いてしまい、その教育長になった女性の語りに耳を傾けなかったことで、彼女自身のキャリア体験の語りを聞くことができなかったという失敗談を具体的なインタビューでのやり取りを引用しながら論じている。社会学的な仮説に基づき専門用語を使った質問をしていく中ではジェンダーと社会階層的背景がどのように彼女のキャリア上昇に関わったか理解できなかったが、社会学的用語を用いずに日常的なことばを使い質問したら、彼女が自らの経験についての詳しい話を始め、秘書という立場から

教育長まで昇進ができたのは、勤勉だったこと、意志が強かったこと、困難を克服する中で自信を獲得していったことだったという具体的語りを聞くことができ、その結果、彼女の職業経験が理解できた。チェイスはこのようなインタビュー経験から、「我々のインタビューとしての仕事は矛盾や沈黙に耳を傾け、彼女（調査対象者）の物語の複雑な分厚い語りを促すような質問を通して語りを促すこと」であると言う。

第2として、筆者が受験体制の理解という漠然としたテーマしかもたず、教師たちの人としての生き方にも興味をもち、インタビューにおいても教育についてだけに限定した質問をしなかったのが、教師たちが自らの人生の物語を話すきっかけになったのかも知れない。それは、佐藤が言う「フィールドとしての個人」という枠組み、すなわち、教師という個人は学校のなかで単に教師としてだけ生きている訳ではなく、もっと重層的で複雑な要素をもった社会的存在であるという認識をもつようになり、テーマの展開が起こり、教師としての側面以上の意識や感情について聞くことができたのであろう。

それはまた、カナダの学校におけるコンピュータ導入計画を検証・評価する研究プロジェクトのインタビュー調査でのグッドソンの経験とも通ずるものであろう。そのプロジェクトでは、グッドソンたちは、インタビューを行い参与観察していく中で、一人の地理教師がコンピュータ導入に反対する「抵抗者」として固定化され、インタビューもそうした固定観念に基づく読み込みにしたがって行っていたが、その教師の職業生活を越えた個人的な生活の事情について、その教師が語り始めてから、彼の行動に対するグットソンたちの解釈が変わっていった。すなわち、その地理教師が50歳を越えた時に父親を亡くし、病気の母親の看病で忙殺されていた状態だったので、コンピュータ導入という新しいことを始めることに難色を示しただけで、決して、イデオロギーにもとづいた「抵抗者」ではないことが明らかになった。単なる教師としての事情ではなく、人としての生活世界についての語りを聞いた時に初めて、新しい解釈、自由な語りが生まれたのであった。グッドソンの調査で指摘されたように、筆者が行った教師のインタビューにおいても、もし教師に対して学校内だけの問題にテーマを絞り、インタビューをしていたなら、教師たちの「人生の物語」を聞き取ることはなかったであろう。

### 研究テーマの変化：女性教師のインタビュー

教師のライフヒストリー研究を展開することを目的として、女性教師の研究を行った(塚田 2002年)。女性教師を男性教師と比較する目的で、男性教師のライフヒストリーの中で意味があるとされた「受験体制」「組合の時代」「出世・昇進」などについての聞き取りを、女性教師からもしようとインタビュー調査を始めた。しかし、結婚している女性教師たちの語りは、「組合の時代」「出世・昇進」「受験体制」についてのことはほとんど含まず、「職場と家庭の両立」あるいは「家事に関する男女間の平等」の物語であった。それは単に、女性が「私的な領域」に生き生きとした語りをするという理由からではなく、女性教師が職業生活を語る時に、家事・育児は語りたくない不可欠な部分であったからである。家事・育児を含む家庭に関わることを語ることなくしては、女性たちの教師生活の物語はありえなかった。その結果、「世代による差」「ジェンダーによる差」がこのインタビュー調査での中心的テーマになった。それは女性の地位が変化し、職場という公的な領域において男女間の平等が当然のこととされていたが、その平等な職場にいながらも、



女性教師たちは、私的領域においてはまったく違った「生活世界の現実」に直面し、職業生活上の行動面、意識面で男性教師とまったく異なったことを経験していたと語った。受験体制についての女性的な「声」は大きく語られることはなかった。日本の受験体制や「出世・昇進」などの地位獲得競争は、男性教師たちの関心ごとにすぎないのではないかという解釈にいたった。

男性教師たちと同じ問い方、「これまでの先生の高校教師としての体験を教えてください」と「高校教育についての意見を言ってください」という同じ2つの質問でインタビューを行ったにもかかわらず、女性教師たちの語りは、「職場と家庭の両立」「家事に関する男女間の不平等」というものになったのは、どのような要因があったのであろうか。

まず第1に、男性教師の研究と同じであるが、「無知の姿勢」で人生の物語を聞く立場をとり、語り手である教師たちの主体的な語りに耳を傾けたからであった。男性教師たちの関心ごとと比較するために調査者である筆者はインタビュアーとして受験体制について尋ねたが、女性教師たちはそれには興味を示さず、自分の「人生の物語」を語り始めた。また、質問の仕方は、男性教師と同じように、「先生の体験を教えてください」ということを全面的に出し、本人の「経験した生」についての語りを促したこともそのような展開を促す要因であったかもしれない。

もう1つの要因として考えられるのは、男性である調査者が一般的な男性役割を果たすだけでなく、家庭において女性的役割の一部を担っていることによる共感的聞き取りの態度があったからであろう。働きながら家事をする時に起こる「時間に束縛された生活」を共感的に理解できるほど家事労働をしている調査者の共感する聞き方に女性教師たちはあたかも女性に話しているかのように語りだしたのではないだろうか。それはアクティヴ・インタビューで指摘されている聞くための戦略として重要とされた調査者である筆者のアイデンティティの提示の仕方によるものであったとも言える。インタビュアーである筆者は、男性の大学教員であるが、共働きをしている者として、保育園への迎え、食事作りなどの共通の話題をすることができたことにも関係していたのであろう。

### 解釈の変化：アメリカ人教師のインタビューを題材として

日本での教師のライフストーリー・インタビュー調査に基づき、日米比較の視点からライフストーリー的手法で、アメリカでの教師体験についてインタビュー調査を行った。13人にインタビュー調査を行ったが、その研究対象者の一人に対して、アメリカにおける特殊教育の現状とその教師の特殊教育への個人的関わりについてのインタビューを行った。ライフストーリー・インタビューの手法を用い、「無知の姿勢」でのぞみ、社会学的仮説ももたずにインタビューを行った。もっと正直に言うならば、筆者はアメリカにおける特殊教育についての知識をまったくもっておらず、なぜ特殊教育を専攻するようになったのかを素朴に質問しただけだった。なぜ特殊教育の専門教師になったかの動機について尋ねると、恵まれた子供時代を生きた彼女は、「豊かであることの後ろめたさのため」と「弱者のために働きたい」という「正義感」から、特殊教育を大学で専攻するようになったと、家族についての語りを含む彼女の個人的経験の中で語った。大学時代に障害者にたいするボランティア活動に参加したことも、その分野に進む要因になったのではないかとも説明した。特殊教育の専門教員になった動機についての語りを聞いた後、彼女がなぜ離婚

したかという話におよび、1970年代後半のフェミニズム運動に関わったことが離婚に関係しているのではないかという語りが話された。その語りを聞き、インタビュアーである筆者がフェミニズム運動、公民権運動、学生運動に興味をもち、かつて日本の大学院の修士論文で1960年代の学生運動の研究をしていたことに触れ、調査対象者が学生運動の1つであるフリースピーチ・ムーブメントが起きた時にパークレイにいたのではないかと、という質問をたまたました。調査対象者は、それに答えて、1964年にパークレイにいて、実際、フリースピーチ・ムーブメントに参加した活動家であったことなどを興奮と情熱をもって熱く語り始めた。学部長として忙しい彼女には、約束も入っており、そろそろインタビューを終わらなければならないと言っていた時であった。それから10数分、学生運動に参加していた頃について詳しく語り、その体験を通して、彼女は、「社会を変革できる」「人を変えられる」ということを実感したのだと言った。そして、その体験によって、教師は、社会、人に影響できる職業であると考え、結局、障害者教育を専攻する教師になったかもしれないとまとめた。学生時代に活動家であったことなど長い間誰にも話したことはなかったけれど、この体験のインパクトは彼女の原点であったと、振り返り語った彼女の姿は印象的であった。

この学生運動体験の語りは、調査者である筆者が、たまたま、1960年代のアメリカの学生運動をテーマとして修士論文を書いたことを言ったのがきっかけになり、熱く語られ、詳細に説明された。もし、調査者が学生運動の研究について話していなかったら、パークレイでの学生運動参加体験が障害者教育を専攻することになった重要な体験であるという語りを聞くことはなかったであろう。インタビュアーである筆者と調査対象者が同じ背景的知識を共有することによって、学生運動体験について語りが始まり、特殊教育の教師になった動機の説明が変化していった。すなわち、特殊教育の教師になった動機の背景に、パークレイでの強烈的な学生運動への参加体験、つまり、「社会を変革できる」という原体験があったのではないかと、彼女は特殊教育の教師になった動機の説明を変化させた。

そのようなトピックスの転換あるいは解釈の展開が起こるのは、インタビュアーの知識だけでなく、そのインタビューが行われている社会的、政治的文脈があるのではないかと山田（2005年）も自らのフィールド調査の体験から書いている。

山田は、高齢者支援活動に興味をもち、支援制度だけでなく、下からのインフォーマルな関係作りである「テルオバンド」に興味をもち、そのバンドは、平均年齢が約69歳の高齢者6人ほどで構成されていたものだったので、魅力を感じ、このテルオバンドについて詳しく知りたいと思い、バンドリーダーのAさんにインタビューを行った。山田の調査の心構えとしては、いかにも楽しそうなテルオバンドの実際について詳しく聞きたいということだった。Aさんにバンド経験があるかどうかという質問をしていく中で、過去の職場でのサークル活動における「仲間づくり」というトピックスが重要なものとして浮かび上がった。これは山田にとって意外な展開であった。

詳しい聞き取り調査をしていく中で、Aさんが若い頃、水平社運動をやっていた父親に反発して、家業を継ぐよりも、一般企業への就職の道を選んだ。ところが就職差別に会い、父親が部落解放運動をやっているから部落出身だとわかってしまったが、その時に、差別に憤るのではなく、逆に父親を恨んだ。しかし別な会社に就職した後で、さまざまな

陰湿な差別に日常的に直面し、これまでの自分を反省して、差別と闘うには「仲間づくり」が大切だと痛感した。そのため、職場では、将棋などのサークルを作り、職場でのコミュニケーションの確立を大事にしたと言う。この経験が後に移り住んだ住吉でもテルオバンドの「仲間づくり」に生きるようになったという語りを山田は聞くことになった。

このようなトピックス転換が起こった理由として、インタビューが行われた社会的、文化的な文脈から生まれたものではないかと山田は解釈する。このトピックスの転換は、テルオバンドが部落解放運動という文脈から生まれてきたからで、単なるめずらしい高齢者のバンドではなく、差別と闘う社会的文脈を用意するバンドだったからであった。また、バンドに入ることを相談した支部長さんがその場に同席し、しかもAさん自身が日常的に生活相談を行う場所である人権文化センターの応接室においてインタビューがなされたということも、この語りを可能にした1つの条件であることにまちがいないと山田は解釈し、テルオバンドが差別と闘うための「仲間づくり」として意味づけられたのであると結論づけている。インタビューにおける1つの体験が異なった社会的、政治的文脈の中で異なって意味付けられうるという例である。

#### 4. 結びに代えて：ライフストーリー・インタビューの可能性

本稿では、まず、ライフストーリー・インタビューがなぜ可能なのか、なぜそのような調査法に研究者がひかれるのか、また、なぜ人々はそのような調査に協力することを受け入れるのかについて論じてきた。次に、ライフストーリー・インタビューの方法としての理論的枠組みとその特徴についてもまとめた。そして、ライフストーリー・インタビューの特徴の認識に基づき、ライフストーリー・インタビューに基づいた他の研究に言及しながら、筆者が実践してきたインタビュー調査を反省的に描写しながら、ライフストーリー・インタビューの意義と有用性について論じてきた。その方法の本質的な特徴は、やまだ（2005年：204頁）が言うように、「研究者が自分の枠組みで世界を見てきたときには気づかなかった新しい世界の見かた」を学ぶ機会である。

ライフストーリー・インタビューはまさに未知の人との出会いであり、研究者としてもっていたパラダイムが壊される経験になりうる。量的研究の場合は、その時まで学んだ研究枠組み、理論仮説などに基づき問いを発するが、質的研究はその問い自体を無意味にするような展開が起こる可能性がある。現在、私たちは生きた人間との生身の出会いが少ない世界で生きている。ライフストーリー・インタビューを行うことはまさにその出会いの場である。今までの自分では考えられなかった世界と出会う可能性をもつことがライフストーリー・インタビューの本質ではないか。調査者が思っていたこととは異なった話に展開した時こそ、ライフストーリー・インタビュー研究の醍醐味があると考えられる。社会学的研究が自分とは異なった人々の意識や感情の複雑さと深さの理解を志向するならば、ライフストーリー・インタビューは1つの方法として有効であろう。

ただ、私たちは研究対象によって方法論を考えるべきであって、方法論がまずありき、と考えるべきではない。もちろん、数量分析的手法がマクロレベルの大きな流れを描写する手段として有効に働くのは十分知っている。ただ、数量分析をやっていく中で、どうしても接近することができない人々の意識、感情レベルの問題をとらえたいと思ったとき、

ライフストーリー・インタビューが最適な方法になるであろう。

### 参考文献

- アトキンソン, ロバート (塚田守訳) 2006年『私たちの中にある物語』ミネルヴァ書房
- アンダーソン, ハーレーン (野村直樹, 青木義子, 吉川悟訳) 2001年『会話・言語・そして可能性』金剛出版
- Chase, Susan E 1995 “Taking Narrative Seriously: Consequences for Method and Theory in Interview Studies” in R. Josselson etc edited *The Narrative Studies of Lives Vol. 3: Interpreting Experience*: 1-26. Sage Publication
- グッドソン, アイヴァー (藤井泰, 山田浩之訳) 2001年『教師のライフヒストリー』晃洋書房
- グッドソン, アイヴァー, パット・サイクス (高井良健一, 山田浩之, 藤井泰, 白松賢訳) 『ライフヒストリーの教育学——実践から方法論まで』昭和堂
- バルドー, ダニエル (小林多寿子訳) 2003年『ライフストーリー エスノ社会学パースペクティブ』ミネルヴァ書房
- ホルスタイン, ジェイムズ, ジェイバー・グブリアム (山田富秋ほか訳) 2004年『アクティヴ・インタビュー 相互行為としての社会調査』せりか書房
- 小林多寿子 2005年「第2章 ライフストーリー・インタビューをおこなう」桜井厚・小林多寿子編『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』せりか書房: 71-118頁
- 桜井厚 2002年『インタビューの社会学』せりか書房
- 桜井厚 2005年「第1章 ライフストーリー・インタビューをはじめ」桜井厚・小林多寿子編『ライフストーリー・インタビュー 質的研究入門』せりか書房: 11-52頁
- 桜井厚編 2006年『戦後世相の経験史』せりか書房
- 佐藤健二 1995年「ライフヒストリー研究の位相」桜井厚・中野卓編『ライフヒストリーの社会学』: 13-41頁
- 塚田守 1998年『受験体制と教師のライフコース』多賀出版
- 1999年『浪人生のソシオロジー』大学教育出版
- 2002年『女性教師たちのライフヒストリー』青山社
- 山田富秋 2005年「第3章 沈黙と語りのあいだ」山田富秋編『ライフストーリーの社会学』北樹出版
- やまだようこ 2005年「ライフストーリー研究——インタビューで語りをとらえる方法」秋田喜代美・恒吉僚子・佐藤学編『教育研究のメソドロギー』東京大学出版: 191-216頁